令和７年度（2025 年度）第１回北海道史編さん委員会　議事録

日　時　令和７年 11 月 12 日（水）14:00～15:00
場　所　かでる２・７　９階　940 研修室
出席者　小磯修二委員長、吉田真弓委員長代理、大住清典委員、折谷久美子委員、
貝澤和明委員、金子ユリ委員、桑原真人委員（オンライン出席）、
坂下明彦委員、柴田倫宏委員、鈴木仁委員、関秀志委員、中村学委員、
西田秀子委員、平野友彦概説部会専門委員
事務局　佐藤室長、前佛主幹、中村主査、髙桑主任、渡辺主任、吉原主任

１　開　会

佐藤室長

○　本日は、御多忙の中、出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただ今から令和７年度第１回北海道史編さん委員会を開催いたします。

○　本日の委員会につきましては、委員 14 名中、13 名出席いただいておりますので、委員会が成立していることを御報告いたします。

○　なお、桑原委員はオンラインでの参加となります。また、本日は概説部会所属の平野友彦委員に出席いただいておりまして、後ほど議事（３）のところにて説明をお願いする予定でございます。

○　本日の議事につきましては、資料編１の刊行報告のほか、通史編の編さん状況、それから、北海道クロニクルについて、を予定しております。

○　議事に移る前に委員と事務局の異動がありましたので、先に報告させていただきたいと思います。

○　まず、委員の異動ですが、３名の方が退任されております。退任された方は、北海道漁業協同組合連合会の伊藤貴彦委員、それから北海道新聞社の小林亨委員、公募委員の関口真奈美委員で、職場の御都合や任期満了ということで退任となっております。

○　次に、就任されました３名の委員の方を御紹介いたします。北海道新聞社常務取締役の大住清典委員でございます。

大住委員

○　大住と申します。よろしくお願いいたします。

佐藤室長

○　続きまして公募委員の鈴木仁委員でございます。

鈴木委員

○　鈴木仁と申します。よろしくお願いいたします。

佐藤室長

○　それから最後に、本日、所用により欠席されていますが、北海道経済連合会専務理事の高田聡委員が就任されております。就任された皆様、今後ともよろしくお願いいたします。

○　なお、北海道漁業協同組合連合会の伊藤委員の後任につきましては、現在、選任手続を行っておりまして、選任後、別の機会に改めて御紹介したいと考えております。

○　次に事務局の異動ですが、今年４月の異動で職員が４名替わっております。まず、私は道史編さん室長の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

○　続きまして立澤の後任になりますが、主幹の前佛です。

前佛主幹

○　よろしくお願いいたします。

佐藤室長

○　それから主査の中村です。

中村主査

○　中村です。よろしくお願いいたします。

佐藤室長

○　最後に主任の渡辺です。

渡辺主任

○　渡辺です。よろしくお願いいたします。

佐藤室長

○　引き続きよろしくお願いいたします。

○　続きまして資料の確認をしたいと思いますが、次第、出席者名簿、配席図の他、資料１から３の３種類と、参考資料１から２の２種類ございます。不足等がありましたらお申し付けください。

○　それでは議事に移ります。これからの進行は小磯委員長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

小磯委員長

○　皆さん、お久しぶりでございます。初めての委員の方もおられますが、よろしくお願いいたします。

○　本日は、まず現代史の資料編１（政治・行政）、これで現代史資料編は完成ということになりますが、これの報告をいただくということ。

○　次に、これからこちら（委員会）での審議が始まります通史編、これの編さん状況について報告をいただくということ。その扱いについては、皆さんとご一緒に議論させていただければと思います。
○　それから北海道クロニクル、これについての今後の取組の御説明と聞いております。以上が今日予定されております議事でございます。円滑な進行を進めていきたいと思っておりますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。
○　それでは、早速、議事に入りたいと思います。

２　議　事（１）

小磯委員長
○　１番目の『北海道現代史 資料編１（政治・行政)』の刊行について、事務局から説明願います。

前佛主幹
○　それでは資料１をご覧ください。昨年度、この委員会にて御審議いただきました北海道現代史３巻目となる『資料編１（政治・行政)』ですが、今年の３月に刊行いたしました。戦後、昭和 20 年から平成 15 年頃までを対象に、北海道の政治行政の特徴を示す資料 523 点を解説付きで掲載した冊子となります。資料の２枚目は、その資料編のＰＲ資料を参考に付けてございます。
○　資料１枚目に戻っていただきますが、この冊子につきましては、これまで刊行いたしました資料編２冊と同様に、道立図書館や（道内）市町村立図書館など、概ね 1,000 部程度を配布しております。資料に記載のある施設において閲覧も可能となっている状況でございます。
○　次に刊行後における道民への情報提供の活動状況です。資料記載のとおりでございますが、今年４月以降、パネル展の実施のほか、道庁ブログでの紹介、インターネットでの電子版の公開、そして先月に刊行記念講演会を実施したところです。なお、この講演会は新聞２紙において取り上げられました。
○　講演会の実施に関しましては、本日出席いただいております吉田委員長代理にも、御多忙の中、協力いただきました。改めてお礼を申し上げたいと思います。
○　最後に、本日、参考資料１として配布しておりますが、毎年出しております編さん機関誌である『北海道史への扉』第６号、これも今年の３月に発行しているという状況でございます。報告は以上です。

小磯委員長
○　ありがとうございました。現代史資料編１の刊行ということで報告いただきました。この件に関して質問等はございますしょうか。
○　吉田委員（委員長代理）は講演会に参加されたということですが。

吉田委員長代理

○　山崎委員と前田委員がしっかりしたものを作っていただいたので、私は勉強させていただきました。

小磯委員長

○　私も聴講させていただきました。

吉田委員長代理

○　（講演会に）お越しいただき、ありがとうございました。

小磯委員長

○　あと、いかがしょうか。この件はよろしいでしょうか。

（　質問等なし　）

２　議　事（２）

小磯委員長

○　それでは議事の２番目『北海道現代史　通史編１』の編さん状況について、事務局から説明願います。

前佛主幹

○　それでは資料２をご覧ください。最初に通史編１の原稿の提出状況でございますが、原稿の提出期限であった今年５月末時点で、全ての分野において原稿の一部が未提出となっております。現時点においても全ての原稿は揃っていないという状況です。

○　原稿が欠落しているため、この委員会でも審議ができない状態になっております。

○　次に通史編１編さんに係る今後の対応でございますが、先月 16 日に開催いたしました企画編集部会において、今後の見通し等を議論し、原稿の提出は今年度末までとする申合せをしたところです。

○　そのため委員会の審議も来年度になることから、通史編の刊行時期の延期が避けられない状況となっております。

○　なお、２枚目の資料ですが、これは今年度末までの原稿提出を想定した今後の見通しをイメージしたものでございます。来年度４月以降に委員会の審議を行いまして、刊行時期は来年度中になるだろうといったような内容となっております。

○　また、補足でございますけれども、通史編１はこれまでの資料編と違って非常にページ数が多いため、早め早めの対応といたしまして、ある程度、原稿が出来上がり次第、委員による原稿の事前確認等も検討しているという状況です。

小磯委員長

○　ありがとうございました。ただいま、状況報告を事務局から説明いただきましたが、経過としては、先月 16 日に企画編集部会が開催されて、今説明があったような状況についての申合せをされたということですので、まず桑原編集長から、その経過について改めて報告いただきたいのですが、桑原編集長、いかがでしょうか。

桑原委員（編集長）

※　オンライン接続不調のため、聴取不能

小磯委員長

○　（※接続不調を踏まえて）それでは坂下委員（副編集長）、補足の説明をお願いできますでしょうか。

坂下委員（副編集長）

○　はい。前回 10 月の企画編集部会では原稿がまだ揃っていない状況だったので、改めて年度内にきちんとした原稿を集めるということの確認を取った状況です。原稿の遅れに関しては、昨年度から厳しいという話は出ていましたが。

小磯委員長

○　厳しいという話は昨年度からありましたね。

坂下委員（副編集長）

○　これまでの資料編（１～２冊）が色々と立て込んでいたこともあって、事務局もそちらに力を注いでいたこと、それから３冊目（資料編１）もギリギリな状況でしたから、そこの分野が大分ずれ込んでしまって、（原稿提出時期を）今年３月から５月に延ばしたところです。

○　それで、（原稿が）かなり出来たところ（（小）部会）と、あまり出来ていないところ（（小）部会）に分かれてしまいまして、全体としては（通史編１の）今年度の出版は無理だということで、前回の企画編集部会で年度末までの原稿提出に変更させていただいたということです。

○　自動的に出版の方も１年ずれてしまうという状況でございます。

小磯委員長

○　確認いたしますと、原稿が揃わず今年度内の出版は難しいということ、これが１つですね。それから原稿については、今年度内に提出することを確認したということですね。

○　これらを併せていくと、今年度内の原稿提出ということで、（通史編１は）来年度の出版ということで進めていく申合せであったと理解してよろしいでしょうか。

坂下委員（副編集長）

○　そうです。それについては、ここ（委員会）で決めていただくことになりますが。

小磯委員長

○　企画編集部会としては、そういう方向で進めていきたいということを、10 月 16 日の部会で申合せを行ったという状況でございます。

○　それを踏まえて、この委員会として、今後どのような扱いをしていけばいいのか、そこを今日御議論、御審議いただきたいというところでございます。

○　いかがでしょうか。経過から言いますと、昨年度の状況においても全体の編さん作業はなかなか難しい要素が色々あって、少し遅れ気味であったというところでした。

○　さらに、通史の場合は、全体の原稿が揃わなければ通史という形での審議につながらないという、そんな部分もあって、ある程度やむを得ない状況での申合せではないかなと受け止めているのですが、折角の機会ですので、皆さんから御意見やお考えをいただければと思います。いかがでしょうか。

関委員

○　遅れるのは残念なことに違いないのですが、この編集期間については最初からもう少し時間を取るべきではないかという意見がありまして、かなりきついスケジュールかなとは考えておりました。

○　また先ほどの企画編集部会での議論を伺いまして、執筆される先生方もこの仕事に専念するわけではなくて、他の業務も兼ねて忙しい中、仕事をしていただいているので、やむを得ないことだと思います。これから大変だと思いますが、ぜひ頑張って欲しいと思います。以上です。

小磯委員長

○　ありがとうございました。あと、いかがでしょうか。特段の御意見が無ければ、現在の状況を冷静に見つめれば、原稿については今年度いっぱいで提出していただき、来年度刊行という形で進めていただくということを委員会としても申し合わせ、確認させていただくということでいかがでしょうか。

（　異議なし　）

小磯委員長

○　それでは、そのような考え方で今後進めていただくということで、事務局も色々準備が大変でしょうけど、よろしくお願いします。

○　これまでの資料編の作業を振り返ってみますと、委員会としての関与といいますか、大部な資料でもあり、時間がない中で直前に資料が送られてくると、物理的にチェックするのが難しい状況ということもございました。
○　通史を全部通読するとなれば、なかなかな作業になると思われますので、その辺りは余裕を見て、委員会の皆さんにも読んでいただけるよう工夫しながら進めていただければと思いますので、よろしくお願いします。
○　議事の２、『北海道現代史　通史編１』の編さん状況については、以上のような形で進めていくということで、御了解いただきました。ありがとうございました。

２　議　事（３）

小磯委員長

○　それでは議事の３番目、『北海道クロニクル』について、説明をお願いしたいと思います。今日は（概説部会から）平野委員に参加いただいており、説明いただくのですが、その前段で事務局から説明ありますか。

前佛主幹

○　はい。それでは資料の説明をさせていただきます。資料３をご覧ください。資料３は北海道クロニクルのこれまでの検討状況をまとめたものでございます。
○　このクロニクルですが、参考資料２にございます編さん大綱及び計画で「概説」と位置付けられた編さん史でございます。
○　資料編や通史編といった「現代史」に並ぶ冊子となります。これは北海道の歴史に対する道民の理解や関心を深めることを目的といたしまして、考古から現代までの歩みを分かりやすく叙述する冊子となります。
○　主な仕様でございますが、上下巻の２冊構成で、１巻当たり 400 ページ程度を予定しております。
○　各巻の基本構成、章立ての内容につきましては資料３の２枚目の資料に付けてございます。上巻の方、（資料）左側の方でございますが、考古から江戸時代頃までを、下巻の方は明治時代から現在編さん中の現代史と同じ、2003 年、平成 15 年頃までを対象としています。
○　執筆する対象時代が非常に長いため、章立ての構成は、基本、章は時代区分で設定しており、節はその時代区分における主な出来事を中心として構成しています。
○　章の数で言いますと、上巻は 10 章構成で、下巻は４章構成を想定しております。対象時代が長い上巻は章の数が多くなり、叙述する歴史的出来事が多くなる下巻の方は、節の数が多くなるといった傾向がございます。

○　なお、この資料の章立ての内容は、あくまで現段階のものでございます。今後の編さん過程で調整されることがございますので、基本的なイメージと認識していただければと思います。
○　また、下巻の第４章以降は現在編さん中の通史編と重なる部分となりますが、現時点ではまだ仮という設定でございます。今後、通史編を担当している部会委員の方々からの意見等も踏まえながら、検討していく予定でございます。
○　資料３の１枚目に戻っていただきまして、今後のスケジュールでございます。本日、委員会に説明した以降、本格的な執筆を開始いたしまして、令和９年１月以降の原稿審議を想定した原稿の提出、確認を行いまして、令和 10 年３月の刊行を目指す形で進めていく予定でございます。説明は以上です。

小磯委員長

○　ありがとうございました。概説部会の平野委員、補足等がございましたら、御説明をお願いいたします。

平野委員

○　この委員会でクロニクルのお話をするのは今回初めてということで、全体の章立てを作った経緯というか、その背景について説明したいと思います。
○　それで上巻と下巻で担当者が分かれているのですが、上巻の責任者でございます谷本委員（概説部会前近代小部会長）が業務の関係で欠席されております。
○　谷本委員からメモをいただいておりますので、僭越ながら私の方で代読させていただきますが、御了承いただきたいと思います。
○　概説部会で編集を進めている北海道クロニクルは、上巻を前近代小部会、下巻を近現代小部会がそれぞれ分担しています。「前近代」と「近現代」は明治維新を画期として区切っています。
○　以下、上巻の構成について簡単に御説明いたします。上巻の対象とする年代は、北海道に人類が到達してから明治維新までの約３万年に及びます。
○　３万年の歴史はアイヌ民族に直接つながる歴史に重なりますから、日本史の時代区分をそのまま適用することは難しく、編集を開始した 2019 年以来、（前近代）小部会では国立アイヌ民族博物館や関係する編さん委員などとの意見交換を踏まえながら慎重に章立てを検討してきました。
○　上巻は 10 章で構成されていますが、このうち第１章から第４章までが主に考古学、第５章以降が主に文献史学、歴史学の叙述となっています。
○　（前近代）小部会の委員は、２名が考古学の専門家、３名が文献史学の専門家、１名が考古学と文献史学をつなぐ古代史の専門家で構成されており、それぞれの専門の章を担当することとしています。

○　叙述に際しては、広く北東アジアにおける北海道地域の歴史的特質を描くことを意識しております。また、1970 年代に編さんされた『新北海道史』以降進展した北海道考古学・北海道史・北海道北方史等の学術的成果、並びに先住民族史としてのアイヌ民族史の視座など、最新の研究潮流を取り入れることを目指しています。
○　本文（章・節）に加え、読みやすさに配慮したコラムの配置も検討してきましたが、上下巻での統一感の担保など、まだ検討すべき要素があります。ただ、刊行のスケジュールに鑑み、大枠でこの章立てをお認めいただき、執筆に着手したいと期しているところであります。よろしく御審議の上、お認めいただきますようお願い申し上げる次第です。
○　以上で谷本委員からの御説明とさせていただきます。続いて下巻の方の説明をさせていただいてよろしいでしょうか。

小磯委員長

○　お願いします。

平野委員

○　では、下巻について御説明したいと思います。下巻の方は（現代部分を除いて）３つの時代に分けて叙述することにしております。その１つ目は第１章として開拓使、それから三県時代、これを扱います。
○　第２章としては北海道庁前期、北海道庁が設置されてから第一次世界大戦が終了するまでを第２章といたします。それから第３章は北海道庁時代後期といたしまして、第一次大戦終了の1920年前後から敗戦までを第３章として叙述する予定でおります。
○　それぞれの章、各時代は２名が執筆を担当するという予定になっております。
○　それから章立てについて、第１章の第８節、第２章の第14節、第３章の第13節の表題を見た限りでは分かりにくい内容になっているかと思いますが、ここは全てアイヌ史を叙述する箇所（節）となります。
○　まだ十分に検討していない段階で章立てを作りましたので、今後、アイヌ史の叙述であることが分かるような表題に変えていくということを考えておりますので、この節の表題は現時点のものであるということで、御理解願いたいと思います。
○　それから近現代の叙述につきまして、どういうことを基本に書いていこうか、その基本的な方針について御説明させていただきたいと思います。
○　１つ目は、開拓政策、拓殖政策の経過を戦後の総合開発の前提として跡づける、そういう考え方でおります。特に、これまでのような「開拓の歴史」という視点だけでなく、「内国植民地」という視点を取り入れて叙述して、北海道史が持っている特質、それから多様性、こういったことを明らかにしたいと考えております。
○　２つ目は、北海道特有の歴史事象を北海道地域史としてだけでなく、日本近代史、国際関係史の中で位置付けようと考えております。

○　３つ目は、北海道全体としての地域社会の形成、道内各地の地域社会の形成についても跡付けようと考えております。
○　４つ目は、行政、財政、経済、教育、こういった分野だけではなく、政治史、社会史、女性史、文化史などにも配慮して叙述をするという考え方を持っております。
○　５つ目は、アイヌ史についてですが、アイヌ史に関しましては、「社会の中で主体的に活動するアイヌ民族」という視点で叙述する考え方を持っております。
○　以上、こういった基本的な方針を持って叙述に臨もうと考えておりますので、御審議のほどよろしくお願いします。私からの説明は以上です。

小磯委員長
○　ありがとうございました。北海道クロニクルについて、事務局の方からスケジュールを含めた説明と、現段階での構成（章立て）の考え方といったものを、谷本委員からの伝文も含めて平野委員から御説明をいただき、今お話があったような形で進めたいということでございます。
○　今日はあくまで、これで決めるということではなく、クロニクルの進め方の今の状況について、皆さんの忌憚のない御意見を折角の機会ですのでいただければと思います。
○　クロニクルにつきましては、初めてこの委員会で議論することになりますので、皆さんのお考えなり、御意見なりがあれば、この機会にいただければと思いますのでよろしくお願いします。いかがでしょうか。

関委員
○　先日、事務局の方から資料を送っていただきまして、今お話がありましたとおり、クロニクルについては今回が初めての議論になります。
○　私も永年歴史学をやってきましたが、ある意味では、各論よりも概説が難しいということを経験してきましたので、御担当の研究者（執筆者）の方々が大変苦労なさって章や節の構成を立てられたのだと思い、感謝申し上げます。
○　それで平野委員から、この構成についての基本的な考え方について、色々な観点も含めてお話いただきましたので、私の疑問もかなり解決しているのですが、２点の観点でこの資料にある構成を丹念に見させていただきました。少しお時間をいただいてよろしいでしょうか。

小磯委員長
○　お願いします。

関委員
○　あくまでも私の感想ですので、何かの参考にしていただければと思います。

○　それで章と節がこれでいいかどうか、ということを考える前に、今御説明にもあった色々な観点があるとは思うのですが、資料３の最初に記載のある基本的な考え方、一般道民に分かりやすく叙述する、それから研究成果をどのように反映するかという２点で章と節を見せていただきました。

○　『新北海道史』以降、新しい研究成果がかなり蓄積されたと思われる分野を言いますと、私の考えではアイヌ民族史がまず挙げられると思います。

○　アイヌ民族史、あるいはアイヌ文化史であるのが１つ。それから生活文化史、学術的に言うと民俗学なども含めたものになりますが。それからいわゆる掘り起こし運動も含めた民衆史の研究、女性史の研究もかなり進んだと思われます。

○　それから自治体史の編集も含めた地域史の研究成果、道内各地に博物館や文書館などの文化財の研究とか、考古学とは別の産業考古学という新しい分野の学問もかなり蓄積があります。

○　そのような研究成果等を念頭に置きながら、（叙述の）中身は分かりませんので、章と節のタイトルに絞って見せていただいた感想になります。

○　上巻と下巻がありますが、上巻についての全体的な私の感想としては、大変その研究成果を取り入れており、大きな構成としてあまり違和感はなかったです。

○　ただ、一般道民が分かりやすいかどうか、といった観点から言うと、例えば第６章の第２節の「国内静謐」（こくないせいひつ）という言葉があります。歴史学の方々は使うのですが、一般道民にとって静謐という言葉は分かりやすいのか、といったようなことが多少引っかかりました。

○　それから第10章の第１節に「弁別」（べんべつ）という言葉が出てきます。これも学術的には良いとは思いますが、一般道民のためにはもう少し分かりやすい表現であればと思います。

○　今後、章や節の項目も含めて議論されると伺いましたので、これから変わり得るのだと思いますが、そんなようなことを考えていただければと思います。

○　それから第10章の第５節に「ジェンダーとひとの一生」というタイトルがあって、これはちょっと現代的で魅力的なタイトルだなと思います。中身はどのように記述されるかは分かりませんが非常に魅力的だなと見せていただきました。

○　下巻につきましては、全体的には、今、平野委員から御説明がありましたとおりで異論はないと思います。

○　ただ、第１章、２章、３章に共通しているのですが、先ほど、平野委員の方からアイヌ民族史を叙述するというお話がありましたけれども、少なくとも節（タイトル）には、そういった表現がないので、それぞれの章に節を設けてアイヌ政策史とか、アイヌ社会とか、アイヌ文化が（北海道）開発の過程で激変して崩壊していく、そういう生活文化も含めた過程を叙述するような節を設けた方が良いのではないか、分かりやすいのではないかという気がしました。

○　それから第２章の第４節と第14節は両方とも移民に関わる節ですが、全体的な流れからいくと視点は違うので、これはこれでいいかなとは思いますけど、節数が多くなるようでしたら、両方を統合して叙述するやり方もあるのかなと思いました。
○　それから細かなことですが、第３章の第13節、これはおそらく変えられると思いますが、タイトルがちょっと長すぎるのではないかという気がしました。
○　時間の関係もありますので、以上で終わりたいと思います。何かの参考になればありがたいです。以上です。

小磯委員長

○　ありがとうございました。幅広い視点での御指摘、御意見をいただきました。今日は色々な立場でのそれぞれの考え方を御披露いただきながら、それを少しでも反映していただければという議論でございますので、他にいかがでしょうか。

貝澤委員

○　この上巻・下巻を通して拝見させていただきました。上巻については、先ほど、御説明がございましたが、３万年前から、北海道がまだ島ではなかった時（他の陸地とつながっていた時）からかもしれませんが、人が今まで連綿と続いてきているのだということが、この中で示されておりまして、私もアイヌ民族の一員としてアイヌ協会で仕事をしているわけですが、記述として、しっかり根ざした記録として広めていただくということが非常に重要だと思いますので、こういう形で取り組んでいただくのは、本当に感謝します。
○　下巻については、関委員がおっしゃったように、アイヌのことをどのように盛り込んでいくかということは、平野委員の御説明により、その方向性等は十分私も理解いたしました。
○　今後この中（クロニクル）で、どのようなところでアイヌとの関わりがあって、道民と一緒にこれまで来たのかという視点、開拓 100 年の開拓史観だった時代から 50 年経っているのですから、そこは視点を変えてですね、北海道の成り立ちが明治維新以降からではなく、その前からのつながりがあって今に至っているという考え方の下で 150 年の命名が行われたということもございますので、そういったところが要所要所で、章立て等で工夫されてくるのかなと思っていますので、そういった部分では期待、よろしくお願いしたいなという感想を持ちました。
○　これ（クロニクル）の編さんもそうですが、先ほどの通史編についても委員の方々が並行して進めていくのですが、そういった意味ではかなり負担が大きいのかなと思います。
○　来年の予定として、令和８年３月に通史編２の原稿提出と書かれていますが、個人としては、期間中の目標を立てて進めていかなければならないとは思いますが、より良いものを作る、編さんするという面において、あまりこれに縛られているというの

もいかがなものかなという感想を持ちましたので、付け加えさせていただきます。

小磯委員長

○　ありがとうございました。最後の点につきましては、これまでも委員会の中で、当初の計画期間内にきっちりやるということと、やりながら考えていきましょうという部分が含みとしてございました。

○　今改めてここまでやってきてどうだったのだろうか、というところを振り返りながら編さん作業を進めていくということも大事だと思いますので、そういう視点での御意見であると思いながらお聞きいたしました。

○　西田委員は概説部会のメンバーでいらっしゃいますが、いかがでしょうか。

西田委員

○　特段のコメントはないのですが、上巻で直した方がいいかなというところで、第１章、第２章（第１章【約30000～15000年前】、第２章【約15000～2400年前】）は、何年前の〝前〟が記載されているのですが、第３章は【約2400年～５・６世紀】と、〝前〟が欠落していますので、2400年前の〝前〟を入れた方がよろしいのではないでしょうか。

平野委員

○　そうですね。

西田委員

○　あと、下巻の方で平野委員から御説明いただいたのですが、叙述する人数は第１章、第２章、第３章の明治期から敗戦までを各章各２人と説明されたのですけれども、アイヌ民族史をお書きになる方もいらっしゃるので、各３人ということですね。

平野委員

○　そうですね。申し訳ありません。ありがとうございます。

西田委員

○　そのようなことで第１章の第８節と、第２章の第14節、第３章の第13節はアイヌ民族史が入るのですが、他の節の中に更に細かく（アイヌ史を）入れていくのは非常に書きにくいと思うので、（アイヌ史の叙述は）第８節、第14節、第13節とした方が、書き手としては書きやすいかと思います。タイトルはもちろん変わっていくことで良いのではないかと思います。

○　また、下巻第４章の戦後編（現代）ですが、今、通史編をお書きになっているわけです。その進捗具合に応じて、開拓使・三県時代から現代の2000年ちょっと過ぎ辺りまで通したものがどのようなものに見えてくるか、その辺りもまた楽しみな調整にな

るという気もいたしますので、（委員会で）承認いただければ執筆に取りかかれるのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

小磯委員長

○　ありがとうございます。今、西田委員が最後におっしゃった部分ですね、今日、こういう形で決めるということではなく、あくまで現段階での考え方というか、通史編がどういう形で出てくるのか、それによってクロニクル、特に下巻の第４章というのは、まさに通史編との関わり方が大きいので、そういったところもにらみながら、クロニクルを進めていただかなければならない難しさもあるのかなというところもお話を聞きながら感じておりました。

○　そこを委員会としてどう受け止めながら進めていくのかというところはまだ十分議論されていないということですね。そのようなところも事務局と相談しながら、今後のクロニクルの扱いについては考えていきたいと思っております。

○　また、１つの大きな柱である〝分かりやすさ〞、道民にいかに多くこれを読んでいただき、自分たちの物として位置付けていただくか、そこに向けての取組というところですね。そこはこの委員会の役割の部分でもあるのかなというふうに感じておりますので、改めて今後の審議に向けての問題意識というところで、皆さんの御意見を引き続きお聞かせいただければと思います。

○　その他よろしいでしょうか。それでは色々と検討課題は残されていますが、今日、この場で出た意見等を踏まえて、今後のクロニクルの執筆に向けて、準備いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。平野委員、今日はありがとうございました。

○　今日予定された議事は以上でございますね。全体を通して何か御意見なり、御質問なり、皆さんからございますか。鈴木委員は公募委員で初めて参加されたのですが、御感想があればお願いします。

鈴木委員

○　終わった話で恐縮ですが、クロニクルの項目（章立て）のところで、例えば「コシャマインの戦い」とか「シャクシャインの戦い」というのがあります。

○　『新北海道史』では『新撰北海道史』と同じように、「コシャマインの乱」とか「シャクシャインの乱」となっていて、小項目のところも『新撰北海道史』では、蝦夷、蝦夷の反乱とその征伐だったのが、『新北海道史』でもやはり、アイヌの反乱とその討伐、若干変わっても同じニュアンスだったのですよね。

○　今回（クロニクル）は節の名前（タイトル）にもなっていますから、おそらくもっと客観的にアイヌ側の視点を取り入れた書き方になるものと思います。

○　通史は民間の出版社からも北海道史といったもので出されていますけど、やはり北海道が出す出版物で、ようやくこのように書けるようになったというのが大きなこと

だと思います。

○　（歴史的な出来事を）凝縮するので、もっと書きたいことが色々あって大変だと思うのですが、出すことそのものが大きなことではないかと思います。

小磯委員長

○　ありがとうございました。他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

○　今日の議論を踏まえれば、（通史編１については）一応、今年度いっぱいで原稿を揃えて、来年度に向けて発刊ということで、それに向けての委員会の対応、その時期や進め方等については、また御相談させていただきながら進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。事務局の方から何かございますか。

佐藤室長

○　クロニクルにつきまして、章立ての細かい修正が今後生じるということを前提といたしまして、大きな方向性としては執筆を開始していただくということでよろしいでしょうか。

小磯委員長

○　はい。それは当然準備を進めていただくとして、私からのお願いとしては、委員会の考え方や意見をできる限り反映しながら進めていただければと思います。

佐藤室長

○　議事録につきましては出来上がり次第公開していきますし、執筆する委員の方々にも今日の議論の内容をお伝えした上で進めていただきたいと思います。

小磯委員長

○　それでは議事が終了しましたので、進行を事務局にお返しいたします。

３　閉　会

佐藤室長

○　これをもちまして、第１回北海道史編さん委員会を終了いたします。
　お忙しい中、委員の皆様ありがとうございました。